

おしの

芥川龍之介

青空文庫

ここは南蛮寺なんばんじの堂内である。ふだんならばまだ硝子画ガラスエの窓に日の光の当っている時分であろう。が、今日は梅雨曇りだけに、日の暮の暗さと変りはない。その中にただゴティツク風の柱がぼんやり木の肌はだを光らせながら、高だかとレクトリウムを守っている。それからずっと堂の奥に常燈じょうとう明の油火あぶらびが一つ、龕がんの中に佇たたずんだ聖者の像を照らしている。参詣人はもう一人もない。

そう云う薄暗い堂内に紅毛人こうもうじんの神父しんぶが一人、祈祷きとうの頭を垂たれている。年は四十五六であろう。額の狭いせま、顴骨かんこつの突き出た、頬鬚ほおひげの深い男である。床ゆかの上に引きずった着物きものは「あびと」と称とえる僧衣そういらしい。そう云えば「こんたつ」と称とえる念珠ねんじゆも手頸てくびを一巻き巻いた後のち、かすかに青珠あおたまを垂たらしている。

堂内は勿論ひっそりしている。神父はいつまでも身動きをしない。

そこへ日本人の女が一人、静かに堂内へはいつて来た。紋もんを染めた古帷子ふるかたびらに何か黒い帯おびをしめた、武家ぶけの女房らしい女である。これはまだ三十代であろう。が、ちよいと見たところは年よりはずつとふけて見える。第一妙に顔色が悪い。目のまわりも黒い暈かきをとっている。しかし大體だいたいの目鼻めばなだけは美しいと言つても差支えない。いや、端正に過ぎる結

果、むしろ険のあるくらいである。

女はさも珍らしそうに聖水盤や祈祷机を見ながら、怯ず怯ず堂の奥へ歩み寄った。すると薄暗い聖壇の前に神父が一人跪いている。女はやや驚いたように、ぴたりとそこへ足を止めた。が、相手の祈祷していることは直にそれと察せられたらしい。女は神父を眺めたまま、黙然とそこに佇んでいる。

堂内は不変ひっそりしている。神父も身動きをしなければ、女も眉一つ動かさない。それがかなり長い間であった。

その内に神父は祈祷をやめると、やっと床から身を起した。見れば前には女が一人、何か云いたげに佇んでいる。南蛮寺の堂内へはただ見慣れぬ磔、仏を見物に来るものも稀ではない。しかしこの女のここへ来たのは物好きだけではなさそうである。神父はわざと微笑しながら、片言に近い日本語を使った。

「何か御用ですか？」

「はい、少々お願いの筋がございまして。」

女は慇懃に会釈をした。貧しい身なりにも関わらず、これだけはちやんと結び上げた筈。鬚の頭を下げたのである。神父は微笑んだ眼に目礼した。手は青珠の「こんた

つ」に指をからめたり離したりしている。

「わたくしは一番ヶ瀬半兵衛の後家、しのと申すものでございます。実はわたくしの倅、新之丞と申すものが大病なのでございますが……」

女はちよいと云い澱んだ後、今度は朗読でもするようにすらすら用向きを話し出した。

新之丞は今年十五歳になる。それが今年の春頃から、何ともつかずに煩い出した。咳が出る、食欲が進まない、熱が高まると言う始末である、しのは力の及ぶ限り、医者にも見せたり、買い薬もしたり、いろいろ養生に手を尽した。しかし少しも効験は見えない。のみならず次第に衰弱する。その上この頃は不如意のため、思うように療治をさせることも出来ない。聞けば南蛮寺の神父の医方は白癩さえ直すと云うことである。どうか新之丞の命も助けて頂きたい。……

「お見舞下さいますか？ いかがでございましょう？」

女はこう云う言葉の間も、じつと神父を見守っている。その眼には憐みを乞う色もなければ、気づかわしさに堪えぬけはいもない。ただほとんど頑なに近い静かさを示しているばかりである。

「よろしい。見て上げましょう。」

神父は顚鬚あごひげを引張りながら、考え深そうに頷うなずいて見せた。女は靈魂れいこんの助かりを求め来たのではない。肉体の助かりを求めに来たのである。しかしそれは咎とがめずとも好よい。肉体は靈魂の家である。家の修しゅう覆ふくさえ全まったければ、主人の病もまた退き易い。現にカテキスタのフワビアンなどはそのために十字架じゅうじかを拝するようになった。この女をここへ遣つかわされたのもあるいはそう云う神意かも知れない。

「お子さんはここへ来られますか。」

「それはちと無理かと存じますが……」

「ではそこへ案内して下さい。」

女の眼に一瞬間の喜びの輝いたのはこの時である。

「さようでございますか？　そうして頂ければ何よりの仕合せでございます。」

神父は優しい感動を感じた。やはりその一瞬間、能面のうめんに近い女の顔に争われぬ母を見たからである。もう前に立っているのは物堅ものがたい武家の女房ではない。いや日本人の女でもない。むかし飼槽かいおけの中の基督キリストに美しい乳房ちつぷさを含ませた「すぐれて御愛憐ごあいれん、すぐれて御柔軟ごにゅうなん、すぐれて甘くまします天上うましの妃きさき」と同じ母になったのである。神父は胸そを反そらせながら、快活に女へ話しかけた。

「御安心なさい。病もたいていわかつています。お子さんの命は預りました。とにかく出来るだけのことはして見ましょう。もしまた人力に及ばなければ、……」

女は穏かに言葉を挟んだ。

「いえ、あなた様さえ一度お見舞い下されば、あとはもうどうなりましても、さらさら心残りはありません。その上はただ清水寺の観世音菩薩の御冥護にお縋り申すばかりでございます。」

観世音菩薩！ この言葉はたちまち神父の顔に腹立たしい色を漲らせた。神父は何も知らぬ女の顔へ鋭い眼を見据えると、首を振り振りたしなめ出した。

「お気をつけなさい。観音、釈迦八幡、天神、——あなたがたの崇めるのは皆木や石の偶像です。まことの神、まことの天主はただ一人しか居られません。お子さんを殺すのも助けるのもデウスの御思召し一つです。偶像の知ることではありません。もしお子さんが大事ならば、偶像に祈るのはおやめなさい。」

しかし女は古帷子の襟を心もち顫に抑えたなり、驚いたように神父を見ている。神父の怒に満ちた言葉もわかったのかどうかはつきりしない。神父はほとんどのしかかるように鬚だらけの顔を突き出しながら、一生懸命にこう戒め続けた。

「まことの神をお信じなさい。まことの神はジュデアの国、ベレンの里にお生まれになつたイエズス・キリストばかりです。そのほかに神はありません。あると思うのは悪魔です。墮落した天使の變化です。イエズスは我々を救うために、磔木にさえおん身をおかけになりました。御覽なさい。あのおん姿を？」

神父は厳かに手を伸べると、後ろにある窓の硝子画を指した。ちようど薄日に照らされた窓は堂内を罩めた仄暗がりの中に、受難の基督を浮き上らせている。十字架の下に泣き惑つたマリヤや弟子たちも浮き上らせている。女は日本風に合掌しながら、静かにこの窓をふり仰いだ。

「あれが噂に承つた南蛮の如来でございますか？ 倅の命さえ助かりますれば、わたくしはあの磔仏に一生仕えるのもかまいません。どうか冥護を賜るようにな御祈禱をお捧げ下さいまし。」

女の声は落着いた中に、深い感動を感している。神父はいよいよ勝ち誇つたようにうなじを少し反らせたまま、前よりも雄弁に話し出した。

「イエズス是我々の罪を浄め、我々の魂を救うために地上へ御降誕なすつたのです。お聞きなさい、御一生の御艱難辛苦を！」

神聖な感動に充ち満ちた神父はそちらこちらを歩きながら、口早にキリスト基督の生涯を話した。衆しゅうとく徳備り給う処女おとめマリヤに御受胎ごじゆたいを告げに来た天使のことを、厩うまやの中の御降誕のことを、御降誕を告げる星を便りに乳にゅうこう香かうや没薬もつやくを捧げささげに来た、賢い東方の博士はかせたちのことを、メシアの出現をおそ懼れるために、ヘロデ王の殺した童子どうじたちのことを、ヨハネの洗礼を受けられたことを、山上の教えを説かれたことを、水を葡萄酒ぶどうしゆに化せられたことを、盲人の眼を開かれたことを、マグダラのマリヤに憑つきまどつた七つの悪鬼あつきを逐おわれたことを、死んだラザルを活かされたことを、水の上を歩かれたことを、驢馬ろばの背にジェルサレムへ入られたことを、悲しい最後の夕餉ゆうげのことを、橄欖かんらんの園のおん祈りのことを、

……

神父の声は神の言葉のように、薄暗い堂内に響き渡つた。女は眼を輝かせたまま、黙もくね然んとその声に聞き入っている。

「考えても御覧なさい。ジェズスは二人の盗人ぬすびとと一しよに、磔木はりきにおかかりなすつたのです。その時のおん悲しみ、その時のおん苦しみ、——我々は今想おもひやるさえ、肉が震ふるえずにはいられません。殊もつたいに勿体もつたいない気きのするのは磔木の上からお叫びになつたジェズスの最後のおん言葉です。エリ、エリ、ラマサバクタニ、——これを解けばわが神、わが神、

何ぞ我を捨て給うや?……」

神父は思わず口をとぎした。見ればまつ蒼さおになつた女は下唇したくちびるを噛んだなり、神父の顔を見つめてゐる。しかもその眼ひらめに閃ひらめいてゐるのは神聖な感動でも何でもない。ただ冷やかな軽蔑けいべつと骨とこにも徹とどりそうな憎悪ぞうおとである。神父は恫気あつけにとられたなり、しばらくはただ唾おしのように瞬またたきをするばかりだつた。

「まことの天主、南蛮なんばんの如にやらい来きとはそう云うものでございませうか?」

女はいままでをつつましきにも似にず、止めを刺さすように云い放はなつた。

「わたくしの夫、一番いちばんヶ瀬半兵衛せはんべえは佐佐木家の浪人ろうにんでございませう。しかしまだ一度も敵たかの前に後うしろを見せたことはございませう。去さんぬる長光寺ちやうこうじの城攻めの折も、夫は博奕ばくちに負けましたために、馬はもとより鎧よろい兜かぶとさえ奪うばわれて居ゐつたそうでございませう。それでも合戦かっせんと云う日には、南無阿弥陀仏なむあみだぶつと大文字だいもんじに書いた紙の羽織はおりを素肌すだに纏まとい、杖つつきの竹たけを差し物ものに代かへ、右手みぎてに三尺五寸の太刀たちを抜き、左手ひだりてに赤紙あかぎの扇あふぎを開ひらき、『人の若わかしゆ衆しゆを盗ぬすむよりしては首くびを取とりよと覚悟かくごした』と、大声おほこゑに歌をうたいながら、織田殿おだどのの身内みうちに鬼おにと聞きえた柴田しばたの軍勢いくさを斬きり靡なみけました。それを何ぞや天主てんしゆともあろうに、たとい磔木はりきにかけられたにせよ、かごとがましい声を出ですとは見下みさげ果はてたやつでございま

す。そう云う臆病おくびようものを崇める宗旨しゅうしに何の取柄とりえがございましょう？ またそう云う臆病おくびようものの流れを汲くんだあなたとなれば、世にない夫の位牌いはいの手前せがれも倅せがれの病は見せられませんか。新之丞しんのじようも首取りの半兵衛と云われた夫の倅せがれでございませう。臆病おくびようものの薬を飲まされるよりは腹を切ると云うでございませう。このようなことを知っていれば、わざわざここまで来こまいものを、——それだけは口惜くちおしゆうございませう。」

女は涙を呑みながら、くるりと神父に背を向けたと思うと、毒風どくふうを避ける人のようにさつさと堂外へ去つてしまった。瞳目どうもくした神父を残したまま。……

(大正十二年三月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「中央公論」

1923（大正12）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2012年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おしの
芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>